



森 信 三 先 生 参 究 誌

通巻149号 平成28年4月1日発行

### 「修身教授録」探求 (第百十三回) 高等科の子たち

森 信 三

#### ■将来教育者となる人へ

今日の題目は少し変わって、いるところ、うが、しかし今日少し感ずるところがあり、すので、この問題について話したいと思います。これは現在諸君が直接身に示すように、これは教育者となるに当面して、諸君が学校の先生になる人々であり、特に小学校の先生になる人々である以上、諸君らにとっては最も深い関係がある問題と思っておくべきです。それゆえ今日これについて話したいので、決して早すぎるとは思わないのであります。

#### ■高等学校卒業生の割合

では一体この「高等科の子たち」という題によって、私はいかなることを話そうとしているのでしょうか。諸君それぞれが当てることが出来ますか。もし諸君それぞれを当てることが出来るとしたら、それは無理とんでもないです。しかし、たかとなんでも出来るように、おそらくそれは無理というものです。全て人間というものは、他人から言われて初めて気づくものであり、さらには直接我が身がそれに当って初めてわかるものであります。また一応はそれで差し支えないとも言えます。さて変に前置きが長くなりましたが、私が今日この「高等科の子たち」という事柄を、今仮に問いの形にして申し上げたいと思います。

ば「一体育現在の我が国において、高等小学校を卒業した割に、言えれば、少くとも、中学と同等の割合に入らうことになり、その上、割合は少年の年齢と比べて、諸君の年齢が上がるにつれて、割合はますます大きくなる。これは、諸君が、いよいよ、(挙手する人一人もなし)やはいなさうと見当がつきかねるでしょう。では、話を進める必要から申し上げます。うが、いよいよ、多少の差はありますが、す。たい、84・5%の差は、前に行なうべきです。残りの15%は、後に行なうべきです。これは、諸君の身の辺りに出ていくのです。これに、君は、君自身も、その15%内外の中に、実は、諸君自身も、その15%内外の中に、問題とされたことがありますか。

#### ■特権を持つ人の使命

多くは自己に与えられている特権について、の、従って、またそれらの人々は、特別な権利を持っています。十分に感謝の念を持つべきです。従って、今、諸君自身も、一人として、この重大問題に、一応のま、深く考え、この重大問題に、一応のま、しかし、ながら、今、角度を変えて、諸君の身

分が師範生であつて、近き将来において  
卒業して教師となり、その立場に立  
つべき運命にある一事に想到する時、こ  
の問題は決してこれを諒とすべきところ  
がないわけでもない。などという生温い  
ことを言つてすみませぬ。すなわち諸君自  
身の「やがてはそれら恵まれない子等の人  
生の「師」として立たねばならぬ重責に  
ある以上、諸君としてはこの問題に對し  
て十分なる自覚と覚悟とを持つている必  
要があると思ふのです。「人生の師」など  
という、諸君はそれは自分のことでは  
ないと、諸君はそれはいづくんぞ  
知らない、諸君はそれはいづくんぞ  
知らん、諸君はそれはいづくんぞ  
對して、その人生の道を指示してやる大  
責任があるのであります。

私の言葉がピツタリと響かない人も少  
くあるまいと思ひます。しかし、それは  
君の上、それら大多数の恵まれない少年の  
の上、引き比べて考へてやることをして  
いないからであります。そこで今この問  
題は、これを次のような形に改めて言ひ  
表すと、あるいは諸君にも多少ははつき  
りとした形で問題となるかと思ふのであ  
ります。それは、それもそれらの少年は、  
単に高等科卒業といふこと、以て人生の最  
高にして、かつ最終の学歴として、その生  
涯を果てる運命を負つた少年たちであ  
る。と、いふことでありませぬ。もちろん斯  
様に申したからとて、事実としては何ら  
変化を来たしたわけではありませぬ。何  
かこのように角度から、このように表現  
した時、あるいは諸君にも始めて多少の現

現実感をもつて訴えることが出来るかと  
思ふのである。同時に私が多  
い問題をこのように重大な問題として、諸君  
訴えようとするに、かと思ふことも多  
くは、お分りになるかと思ふのでありませ  
ぬ。実際に小学校の高等科卒業を以て人生  
最高にして、かつ最終の学歴として、その  
一生を果つべき運命にある子供達なので  
あります。

分りますが、前に人間と申した事は、自  
分の持つてゐる特権に對しては充分なる  
反省を持ち、いづれに對しては、従つ  
てこの公理は遺憾なきがら、多分の思  
幸な少年たちは、教えられる先生方、私  
当ては、まるきり、高等科の生徒たち、私  
と、おられる、先生方は、概してこの思  
つておられる、先生方は、概してこの思  
の、おられる、先生方は、概してこの思  
従つて、それらの子供たち、小学校の高  
等科卒業といふ、世の中、渡つて、人生最  
の、おられる、先生方は、概してこの思  
う、おられる、先生方は、概してこの思  
を、おられる、先生方は、概してこの思  
が、おられる、先生方は、概してこの思  
根拠なく、私に、申す、申す、申す、申す、  
いふ、おられる、先生方は、概してこの思  
大部分の先生方は、尋常科の5、6年持  
つ、おられる、先生方は、概してこの思  
ことを好まない、傾き、高等科を受け持  
そうして、おられる、先生方は、概してこの思  
さ、おられる、先生方は、概してこの思  
して、おられる、先生方は、概してこの思  
この、おられる、先生方は、概してこの思

おいて遭遇して、事柄であります。それは  
間違った卒業生まで、さうして、時には  
相違ないことであつて、時々は  
「この人でも、さうさうな、かナア」  
と、心中驚き、怪しむと、また、嘆息し  
たことも、少なくないであります。

■真の「教育愛」とは

私はこうして出来事に出逢ふ度に、  
なんと打たれるのであつたか、と、思ふ事  
や、さっぱり、さうだつたのか、と、思ふ事  
實際には、たまたま、寂しきであります。  
何となれば、私には、さうした人々の心持  
中には、真の意味での「教育愛」など、言  
うものは、見出す事は、できないからであ  
ります。諸君、「教育愛」といふ事は、決し  
て、単に美しい言葉や概念に終わるもので  
は、ありません。いや、さうではなくて、先  
ほども申したように、高等科卒業を以て、  
人生の最高にして、かつ最終の学歴とせ、  
か、ならぬ、何と、不幸な子等、に對して、  
千々に、人生に對する希望を、持たせ、よ  
ます。先生方、言は、世の多くの高等科、を、  
「どうも、高等科の生徒は、選り、屑だ、  
頭が悪くて、その上、どうも、陰気で、  
ど、人々、が、少なくて、ありませぬ。私  
い、葉を、聞きませぬ、と、思ふ、心、  
を、抱、か、ず、に、は、あ、な、ら、な、い、  
と、面、罵、る、の、で、あ、り、ま、す。」

■己自身が木偶の坊である自覚を

そもそも高等科の子等に対して思いや  
りがないということは、私から言えば実  
はその先生自身のおめでたさから来るこ  
とでありませぬ。何となれば畢竟するに、  
それはその人自身が単に師範卒業という  
資格を以て人生の最高學歷とする自分の  
姿の、みじめさというものに対して、何  
ら省みるところもありません。この自己に  
とどからずでありませぬ。この自己に對する  
深刻なる自省を欠くところから、つい我  
眼前に並み居る不幸な少年たちの生涯に  
對しても、何ら思いやりの念が持てない  
のであります。すなわち自分自身がすこ  
ろ一個木偶の坊になりわづらっているこ  
ろからして、必然相手の運命などを考え  
てやるような心持ちなど、毛頭持ち合わ  
せようがないというのが真相であります。  
しかして、幾十人の子等にとつて何と  
かくととして、本人自身の惨めさは何と  
言う気の毒なことでありませぬ。しか  
し今日の学校教育というものも多くは、  
実はかくの如き状態にあると言つてもあ  
えて過言ではないでせう。それを思う  
とき私は、実にたまらぬ一人でも良  
いのであります。そして、一人でも良  
い一点に、私の底からわかつてくる先  
生が、あつてほしいと思つてくれます。  
いや私の衷心よりの希望としては、世の  
全ての先生方にせめてこの一点だけはわ  
かつていただきたいのであります。

■命がけで子等の将来を拓く

こうしてまた高等科の教育においては、  
いかなることが最も大切であること言う  
ことも、以上述べて参つた所によつて大

方の見当はつくと言えましよう。すなわ  
ちそれは何よりもまず先生方ご自身が、  
「もし自分もこれらの子等と同じように、  
高等科卒業を以て、この世における最高  
にしてかつ最終の學歷としなければなら  
ぬ運命に置かれていたとしたら、自分だ  
つたら一体どうするか」ということを、命  
がけで考へるといふことでありませぬ。

そうしてそこに一導の光明を認めるまで、  
相手の身になつて苦しみ悶え抜くのであ  
ります。然るを「高等科の生徒は選り屑  
だから、頭が悪い」「高等科生は陰氣  
くさいから嫌だ」などというような心が  
けて、どうしてこれらの子等の心が開か  
れましよう。実に高等科の子等に對して  
は、教師は滿眼の悲涙を内に湛えて人生  
の光明の一路を明示し、これを激励して  
やるでなくてはなりません。それでこそ  
それら可憐にして不幸なる運命の子等も  
莞爾（かんじ）として立ち、雄々しく人  
生の前途（かど）に立つことができ  
るのであります。またかくしてこそ身は例  
え一小学校教師の地位にありとほいえ、  
まさしくこれ「人生の師」たるを得るの  
であります。そしてこれが何ら形容の語  
でない事は、高等小学校卒業だけの學歴  
で徒手空拳（としくけん）の獨力よく  
大をなした人々の多くは、世のいわゆる  
宗教家とか大学教授などと言ふ人の前に  
拜跪（はいき）しないので、実にその少年  
の日、自己を激励し以て人生の道を教え  
られた小学時代の「恩師」の前に額づく  
事実によつて明らかであります。

■高等小学校卒業生が日本の将来を担  
うという現実

以上申したことによつて諸君は、私の

言わんとしていることの大體を會得せら  
れたことと思つては、いかしは、たゞ  
高等科生といふことには、いかにせ  
るとつ重要な事柄を申し添えねばなら  
ん。それは先にも申したように、それら  
の少年は国民の85%前後という大部分  
を占めるのであり、従つて國家の地盤は  
實にそれらの人々によつて構成せられ  
るといふことである。故に、またそれら  
の少年の教育如何という事は、直ちに國  
家そのものの根本問題に連なるというこ  
とであります。総じて基礎的・地盤的なも  
のに着眼すると、いふべきは、眞に聰明  
哲なる人にあらずば、眞に聰明なも  
のありませぬ。いやこの現実の基礎的  
着眼するといふことは、単なる才知の  
明と目する程度では出来がたいことであ  
らう。眞にその意義のわかるには必ずや  
て、かの趣意に於いて現人生の厳肅さ  
をもつて當面した経験の要するものであ  
ります。従つて今日私の申しした事柄によ  
つた、なるほど一応のことは、諸君も分  
つたが眞に諸君の力となり、その動かし  
べからざる信念となることには、今後な  
くの修養工夫を要することには、今後な  
りませぬ。しかしここに申しした種々な  
だけなりとも申しておきたいと思つた  
次第であります。

（修身教授録第三卷昭和18年9月 同志同行社刊）

眞の平和とその後（微言）

森信三

○平和と言うものは、ただ「平和よ来たれ！」  
という程度の甘い平和論を唱えるだけで、招  
来せられるものでは絶対にない。現在わが國

における平和論の多くは、単なる平和への願望に過ぎず、さらに厳しく言えば、平和論を口にしないと時節柄具合が悪いから……という程度のものさえないといえない。

○真の平和は、断じてそうした安易な平和論者の力によって招来せられぬことを知らねばならぬ。何となれば人類の深き真実と切実なる希求なくして真の平和の生まれようはないからである。

○今日人類はこのままの状態でも永久平和の世界に入るとは、私には信じられない。いや誰よりも神自身がこれを許したまわぬであろう。

○何となれば真の恒久平和は、人類が民族主体において神に背かんとする自らの宿業を内観することによってのみ招来せられるものだからである。かかる民族主体の根本懺悔（ざんげ）とその悔悟（かいご）的実現の決意なくして、安易に人類の永久平和が招来せられるかに説くは、単に自己欺瞞（ぎまん）であるばかりではなく、さらに人々をも欺く罪大なるものと言わねばならぬ。

○何よりも地上の国際的現実を見よ。この醜状（しゅうじょう）をもつてして、このまま永久平和に入り得るなどと説くは、ひとり自らを欺くのみならず、また実に神をも欺くものと言ふべきであろう。

○神は何よりもまず、おのずからなる状態を欲し給う。地上の国際的現状は、これを以て果たして自然なる神意に近いと言ひ得るであらうか。浅薄なる口先だけの平和論者ほど神より遠い存在はない。

○今日真に神を知るものは、今や全人類が第三次世界大戦への危機に置かれていることを警告すべきであろう。キリストが今日地上に出現しましたとして、これ以上に切言せられる何物があるであろう。

○神の存在を否定する無神論者に対しては、また何をかはいわんやである。しかしキリスト教徒は何よりも「今日もしキリストが出現せられたら何をされ、何を言われるか」を考えなければならぬであろう。

○今日個人としてはとにかく、国家として真にキリストの眞精神を履踐（りせん）しつつあるいかなる国家民族があるであろう。戦争を放棄せる同胞よ！我らこそ真にキリストの道を民族主体において履踐する地上最初の民たるべきことを知らねばならぬ。

○浅薄なる平和論は、内、人間性の奥底に対する内省を欠き外、世界の国際的現実に対する認識の慮浅（りよせん）より来たる。

○神の前に徹底的に自らの否定せられる体験に生きる者は決して甘くはない。自らと同様に神に背く道をたどりつつある者達の陥り行く先が予見できるからである。

○浅薄安易なる平和論に対する批判を以て、好戦的思想と思うほどに甚だしい錯覚はない。何となればこれは神意を軽んずる者の陥る錯覚だからである。

○民族主体の戦争と階級主体の闘争とに、人類の二大宿業（しゆくごう）の存することを把握し得ない平和論ほど、世に浅薄笑うべきものはない。人類は今やこの人類の二大根本宿業を果たしめられんとしつつある。

○しかしそのうち戦争への宿業は原爆の威力により、第三次世界大戦を通して恐らくはその業（ごう）を果たしめられるかと思われるが、階級主体の宿業は果たして第三次世界大戦によって根切りとなると言えらるであろうか。紛争の解決を戦争にまでは訴えない世界が来たとしても、貧富の問題は決して完全な解決を得ないのであるまいか。

○戦争は第三次世界大戦を機とする世界前史で終焉を告げるとしても、貧富の平等化は、人類後史の遙遠なる課題として残される可能

性が多いであろう。しかも人類史の大流が、歩一步その方向へ向かって流つつあることは絶対に疑う余地がない。（昭和24年10月5日発行「開頭」10月号第31号）

あとがきに替えて

昭和24年に森信三先生がお書きになったこの「微言」は、全く現代のコラムとしても十分通用しまいか。いかに人類の成長が遅速かという証左か？いつ第三次大戦が勃発してもおかしくない事件が頻発中である。世界的に大きな民族の移動？難民問題が進行中……。一方小生の目には日本への観光客が増加の一途。これはある意味、我が日本こそ世界のあるべき理想の国家として外国人に映っているのか？だとすれば、ひょっとして欧州は移民の流入をこれ以上認めない連邦を構築する。ここに新たな世界流動の根因が派生しまいか？どう考えても行く末が心配である。日本は近づく大地震に怯えているとして、中国と北朝鮮は国家瓦解が……？どちらが先だとしても我が国は大きな負担を強いられる。各国民単位でどう自分の身を守るか？誰かが言っていた、自助・互助・公助の心構えをと……。そう、まず自分。自分の考えを強固に持ち行動の一步を……。 (30日二纂)

〒633-0003  
桜井市朝倉台東2-538-89  
電話 0744-4513422  
Email: hji3@ken.jp  
http://web1.ken.jp/syushn